

読書感想文指導の構想

灘 尾 正 樹

はじめに

生徒の書くものはずべて、わたくしたちに作文教育についての示唆を与える。授業作文はもとより、読書感想文、ルーム日誌、年賀状、休暇中の便り……それらを、できるかぎり善意に、かつ困語教育的眼を失わないで読みたいと思う。本稿においては、読書感想文指導に絞って、これまでの実践と、模索の中に思う今後への構想を報告してみたい。

一、従来の読書感想文事前指導への疑問

手もとに一枚のプリントがある。これまでの読書感想文指導の一般型と考えてよい。

読書感想文を書く手順

1 読書感想文を書くためには、まず、作品を正確に注意深く読んで、次の点をメモする。

a 登場人物 (1)主人公(あるいはおもなわき役)はどんな人物

か。(身分・性格・思想・心理・言動など)

(2)主人公をめぐる人間関係はどうなっているか。

b 構 成 (1)作品の世界はどのように設定されているか。

(2)話はだれの立場(どんな視点)から書かれているか。

(3)主題のためのプロット(筋)はどう立てられ、どう展開しているか。

c 主 題 作品全体を通して、作者は何を表現し、何を言おうとしているか。

d 表 現 用語・修辭・文体にはどんな特質があり、どんな効果をあげているか。

2 作品を理解したら、次は、それについていろいろの角度から考え、その感想をメモする。

a 登場人物の生き方を自分と比べて、どんなことが考えさせられるか。

b 主題についてどう思うか。

c 最もよいと思うところはどこか。また、作品全体に対する印象はどうか。

d 感銘の深い語はないか。あった場合、それはなぜそんなに感銘が深いのか。

e 他の作品（同じ作者、あるいは他の作者の）と比較してどうか。

3 感想をメモしたら、感想文のアウトラインを作る。文章は、話題ごとに段落ごとに分けて書く。

（作品を理解し）書く材料を集め↓アウトラインを作成し……と、いわゆる文章構成法に従った作文指導の一般型である。

わたくしは、この方式の事前指導に少なからず疑問を感じている。

この事前指導の授業が、生徒たちに書こうという意欲をわかせるかどうか。自分にも書きそうだという気持ちを起こさせ得るかどうか。たとえ意欲的に右の作業（手順）をやったとしても、実際に書く時、理論で考えたようにうまくいくものかどうか。

一つ一つのメモができあがったとしても、文章全体を書きあげるときには、メモとメモの間には書く人間の人間性が微妙に入りこむものであるし、メモを羅列しても文章にはならない。文章を書きあげるには、ある持続的な全体感覚のようなものが必要なのではないか。わたくしは、右の指導事項の一つ一つを、批評や評価の段階で活用したいと思う。作文を志向する授業においては、もっと違う方向からの指導を考えたいと思う。文章に対する全体感覚を会得させ得るような指導を考えたいと思う。

二、作文指導について

1. 実例教育——文例集の作成——

作文教育は実例を持つての教育でなくてはならないと思う。よい実例をさがすことが、作文教育の準備として大切な仕事となる。

○生徒が読んで理解でき、生徒の心に訴える内容を持っているもの。

○句読点が、深い意識と正しさをうたれたもの。

○幾度も読めば、自然に、主題のこと、構成のこと、表現のこと、句読点のことなどが理解されてくるようなもの。

○読むだけで楽しく、ひいては、自分も書いてみようという気持ちを起こさせるようなもの。

○内容的にも、形式的にも、いろいろな種類のもの。

右のような条件を備えた「よい実例」は、なかなか発見できるものではない。

現在わたくしの読書感想文指導用の文例集には、次のようなものが入っている。

○『考える読書』第23回読書感想文全国コンクール入選作品 中学

・高校の部（全国学校図書館協議会編 毎日新聞社）より

・「天平の墓」（金子直子）・「橋山節考」を読んで（間室道子）

・「砂の女」を読んで（谷村建夫）・「蜻蛉日記」を読んで（鈴木俊功）・「老人と海」を読んで（米原拓哉）・エレジー詩集「第四の蛙」より（岡本恵里子）・「ジョニーは戦場へ行った」を読んで（木下真弓）・「あゝ野麦峠」（小野ゆかり）・「詩の生まれるとき」（石井由美）

○読書感想文コンクール優秀作品集（広島県立広島観音高等学校）

より

・太宰治集より「父」（菅田一路）・「風立ちぬ」を読んで（富高京子）・「あすなる物語」を読んで（長岡真理子）・「日はまた昇る」を読んで（延与純子）・「源氏物語（与謝野晶子訳）」を読んで（藤原純子）

○「源平桃」（野地潤家著、文化評論出版、昭和46年発行）

「ひまわり」「虹」「若さー欣豫」「読書の年輪」「夏の花」

（「原民喜の詩碑は：鮮明に建立されていると思う。」まで）「絵はがき文化」（「それにしても、……旅心を誘っている。」まで）

2. 文例集による文章研究

書くことの事前指導としては、「書きかた」の技術指導ではなく、すぐれた文章、野地先生のお言葉によれば、「達意の文章」

（「源平桃」九五ペ）を幾度も読ませて、その感動のよって来るところを考えさせたい。その授業は、主題を要約したり、段落や指示語や一語一語の意味などを考えさせる授業ではない。ともかく文章全体を幾度も読み味わい、生徒個々人がその文章のすばらしさを感じるようにしむけていく授業である。文例集は主として、この授業で使用する。文例集を読む時に前もって指示するのは、次の諸点である。（この指示は、文例集の表紙裏に書きとめる。）

○句読点に注目——「句読点は、ただの符号として打たれているはずのものではない。論理的な表現の、分析の指標である。句読点が克明に上手に打たれているということは、ことが明晰に表現されているということである。」（「これからの国語」、藤原与一著、角

川新書、一三六ペ）

○接続に注目——「口話なり文章なりの流れは、その接続表現によって特色づけられている。接続を読むことが、その文章のすじを正しくつかんでいくことになる。」（同上書、一四三ペ）

○著者の眼と視野に注目——ものの細部をいかにとらえているか。ひとつのものを、それをとりかこむ他のものとのどのように関係させてみているか。

○著者の想像力と思考法に注目——文章をのびやかに進めていく力は、著者の想像力と思考法にある。

三、読書感想文を書く生徒たちに

1. なにを読むか

生徒たちが、なにを読むか、は、大切な問題である。「源平桃」（九九ペ）には、野地先生が「文学へ志向していく契機」となった書物との出会いのことが書かれている。その中の「読むべきときに読んだ本」ということが印象深い。個々の生徒たちは、現在、なにを読むべき時にあるのか。それを判断することはむずかしい。そこで生徒たちには「文庫一〇〇選」（『読書手帖』三好行雄編著、昭和50年4月発行、中央図書）と、「読書感想文全国コンクール入選作品にとりあげられた書物」（広島県立広島観音高校図書館）とを、プリントして紹介するとどまっている。この中の一冊が、読むべきときにあった生徒に読まれることを期待しながら。

2. どこで書くか

いわゆる作文にしろ、読書感想文にしろ、原稿用紙四、五枚に書く作業は、できるかぎり家庭作業としている。教室の机は、メモや書物をひろげるにはあまりに狭い。ただし、家庭のみの作業で浄書までもっていくと、推敲の程度もわかりにくいこともあって、わたくしは、次のようにしている。まず一週間程度の期限を定めて、書きあがった若から一度提出させる。順次わたくしの批評を書いて返却し、家庭で推敲させる。浄書は時間を定めて学校で一斉にさせる。かくして授業においては、そのほとんどの時間を、文例集による文章研究に費やすこととなる。

なお、どこで読むかも考慮せねばならないが、図書室であれ、電車の中であれ、家庭であれ、自分の心を書物の世界に漂よわせることができる場所でさえあればどこでもよいとしている。

3. 書物に向かう時の注意

読書感想文を書く目的を持って書物に向かう場合と、平生の読書において書物に向かう場合とは、その姿勢はおのずから違わねばなるまい。普通に読んで感じたことを書く、程度の読みでは、感じることも、ただなんとなく、となりがちで、書くべきこともなかなかつかめない。書くことがつかめていなくては、書こうと思っても書けるはずはない。

読書感想文を書くために読む時には、読んだ後では感想文を書くのだ、という心構えで読むことが大切であろう。書くための読

書、ということ、思いきって生徒に注意しておきたい。なにかを書かねばならないという心で読めば、読みの途中で多くのことを考えるであろうし、多くのことを考えながら読めば、その書物のどこを大切に考えるかにも思いいたり、書くべきこともつかめてこよう。深い読み、に入る入口も、このあたりにあろうか。「読む人間から書く人間へ変わるといふのは、言ってみれば、受動性から能動性へ人間が身を翻すことである。書こうと身構えた時、精神の緊張は急に大きくなる。この大きな緊張の中で、人間は書物に記されている対象の奥へ深く突き進むことが出来る。しかも、同時に、自分の精神の奥へ深く入って行くことが出来る。対象と精神とがそれぞれ、深いところで触れ合う。」(『論文の書き方』清水幾太郎著、岩波新書、八べ)

4. 書きはじめるまでの注意

(イ) 書くことがつかめたら、しばらく時間をとって、じっと心の中で熟成させること。書こうとすることは他人に話さない方がよいという意見もある。

(ロ) 読後、頭の中に多くの思いはあるのに、書くべきこと、としてなかなかまとまっておかない時は、友人や教師に話してみるとよい。話すことによって、考えがまとまったり広がったりすることも多い。

(ハ) 書くことはだいたいまとまったのに、なかなか書き出せない時は、文例集の書き出しをよく読んでみることに。「考える読書」の各文章の書き出しを研究してみるのもよい。そして、文章を書く者

全てに、こういう時間があるのだと思ひながら待つてゐるとよい。

ふとうまい書き出しが浮かぶものである。書き出しは、緊張しないで、サラリと書き出すのがよい。なお『文章を書く技術』（平井昌夫著、現代教養文庫伍）には、十四種の書き始めの方法が紹介され、解説されている。参考になるであらう。

(イ) 書くことがだいたいきまり、どういう順序で書こうかと考える時は「文章は建築物である。」（『論文の書き方』一〇八ページ）と考えよう。「書きはじめ」と「本論」と「結論」を独立して考え、「本論」の中も、建築資材を組みあわせていくような気持ちで考えていくこと。なお、このあたりのことについては『論文の書き方』九六ページ二三ページに詳しい。

(ロ) 〃、なにを書いてよいかわからない、という生徒には、次のような作業をさせ、書く要領を会得させるとよいようである。

作業1. 『考える読書』にとりあげられた書物（作品）の一冊を指示して読ませる。

作業2. その書物（作品）について書かれた感想文をプリントして与える。

作業3. 右の感想文をみながら、全文をそのまま写すのではなく、一部を自分流に改作して書いていかせる。

作業4. 右のようにしてできあがった文章を、改めて読みなおさせ、さらに一部を変えたり、書きかえさせたりして、自分のものを作りあげさせる。

作業5. 以上の作業の結果できあがった感想文は、自分の作品と考

えてよいと指示し、浄書して提出させる。

右の作業は、他人の思考に乗って考えていくことになり、主体性に欠けるともいえるが、一つの文体を会得させるには効果がある。一つの文体を会得すると、書くことは非常に楽になる。どうしても書けないという生徒に対しては、有効な方法の一つであると思つてゐる。

なお、文体を模倣する、ということについては『論文の書き方』三二ページ三六ページに詳しい。

5. 書き進める時の注意

(イ) 文章を書く作業は、「一字一字、一語一語、一句一句、順々に」（『論文の書き方』一〇〇ページ）書いていく作業、「気の長い時間的過程を静かに歩いて」（同上書一〇二ページ）いく作業である。自分の内面をふりかえりながら、心中に書くべきことが熟するのを待ちながら、静かに書き進めていくことが大切である。

(ロ) 表現すべきことのすじを、ただして、表現するように努めること。

「読むことの教育も書きあらわすことの教育も、表現のすじをただすべきことが骨子となる。表現されたもののすじをただしてとらえ、表現すべきことのすじをただして表現するのである。この、論理性をおもんずるいきかたは、文法教育の立場にはかならない。読むことの教育にも、書きあらわすことの教育にも、そういう意味の文法教育がしみるとおらなくてはならない。」（『これからの国語』

この藤原先生のおことばは、読解と表現とを遊離したものにしな
いための根本の考え方を教えてくださっている。

(イ) 文章にはいろいろな様式の面白さがあると認識して、自分の
思考に自信をもって、自由にのびのび表現していくこと。「表現の
明晰は思考の明確にはかならない。」(同上書、一三五頁)が、高
校生という段階を考慮して、「すべての虚飾から遠ざけ、むだな修
辞によらせない。簡明に短直に、思いのとおりを表現させる。」(同
上書一三二頁)。まっすぐに、まっすぐに、純粋に純粋に、表現
する境地を理想としつつも、ともかくも最初は、自由にのびのびと
書かせたい。

(ロ) 教師に甘えないこと。誰に読まれてもよいように書くこと。
話しことばと書きことばの区別をつけて書くこと。

生徒の感想文を読むと、書きことばと話しことばの区別を明確に
つけていない生徒が多いことに気づく。

○「ある日、作者はわざとみんなの笑い者になろうとして失敗し
た。無理をしたから見破られたんだけど、人ってみんなどこか無
理をしてる面あると思う。」

○「この先生は、鉄三たちのクラスの担任です。そういうせいかい
つも鉄三におどかさされ、そしていつも泣いていました。でも、こ
ういうのはよくあるケースじゃないかな。でも、この場合は、私
もへども吐きそうになった。だって、カエルを二つにひきさい
てたんですよ。こないたずら、いたずらじゃないです。いたず
らっていうのは、もっとかわいいものだと思います。」

なぜこうなるのか。書きことばと話しことばの区別がわかってい
ないのであるがわたくしは、教師に甘えた結果であると考えてい
る。

わたくしの子供の二年前の日記は、「先生。あのね。」で書き始
まる。小学校一年生の段階においてはこれでよいのであるが、この
形が高等学校まで持ちこされてきているのである。教師を話相手と
して設定し、話すように、書いている。かくて、話しことばが随
所に出てくることになる。教師への、話しことばへの、甘えといっ
てよいであろう。

特定の相手を定めて、その人にも言うように書く方が書きや
すいのであれば、その相手は書物の著者とするのがよい。

相手に甘えてしまえば、すじのとあった、十分に表現し得た感想
文にはならない。

(イ) 辞書を手もとにおいて書くこと。

(ロ) 真摯な心で書くこと。

どれほど真摯な心で書いたかが、感想文をよいものとするか否か
を決定する。わたくしは、夏休暇中の便りとして、『源氏物語』の
すばらしい感想文を受けとったことがある。文例集にも収録した
が、教師に対する甘えもなく、真摯な心で書かれた感銘深いもので
あった。

四、生徒の読書感想文作品に対して

1、いかに読むか

生徒たちの作品は、次のような心で読みたいと思う。

○「自分の好みや偏見を去って、あらゆる様式の文章の面白さを認め、あらゆる様式の文章の美しさに敏感でありたい。」（『文章読本』三島由紀夫著、中央公論社、八ページ）

○なぜこの生徒はこういう文章表現をしたのか。書く時の生徒の心身の状態を推察しながら読みたい。

○表現することは苦しいことであり、その苦しさの中から生まれてきた作品であると認識して読みたい。

○読み終ったら、必ず批評を書いて返却するという決意で読みたい。

2、いかに批評するか

個々の作品に対する批評こそ生徒個々人に密着した指導となるだけに、それは作文教育における最も重要なものとなる。

わたくしは『去来抄』―岩鼻やここにもひとり月の客―における芭蕉と去来の姿に、批評の理想の姿をみている。ここには、表現意欲を失わせない批評があり、批評を謙虚に受けいれる心がある。

去来にもわからないで、去来がもっているところ（小林英夫氏の言う「流露」）を、芭蕉は批評によつて的確に指摘し、去来に意識させ、去来はこの批評によつて芸術的にも高まった。まさに理想的な批評である。

批評は、究極においては、人間形成にまでつながることがあるだけに、善意に善意にと心がけ、表現への励まし・になるようなものでありたいと思う。

「国語学力に限ってみても、高校生には、もっと認められ、ほめられていい、表現力・理解力が見受けられる。いわゆるテストのみでは測られぬよさを、あたたかく認めていき、自信を植えつけたいとせつに思う。」（『源平桃』九ページ）

野地先生のこのお心を、わたくしの批評仕事の根底に据えたいと思う。

3、わたくしの批評

わたくしは、生徒の読書感想文作品に対して、二種類の批評を行なっている。

一つは、本文中に書きこんでいく、添削もかねた、いわば部分的批評、一つは、本文の最後に書く講評、いわば全体的批評である。

部分的批評には、句読点への注意、文脈のよじれや誤字の指摘、語順工夫のうながしなど、主に、書きかた（技術）・についての批評を書く。そして、できるかぎり、一人に一つは技術的な工夫・再考をうながす課題を与える。

全体的批評には、主に、書かれたこと・に対する共感や意見、書くべきポイント、思索の深淺、書く態度などについての批評を、思いついて主観的に書くようにしている。生徒の心とわたくしの心とをここでぶつかり合わせたいという気持ちである。

読書感想文とはいえ、生徒一人一人の心の表現がそこにはある。心を表現することは喜びである、という主張もあるが、これは理想の境地であろう。現代という時代の中で、自意識や不安にさいなまれつつ生きる自分の姿を見た時、その内面を表現することは、苦

しくこそあれ、喜びなどといえるであらうか。太宰治の作品に共感を示す生徒が多いのも、現代に生きる自分自身の姿をあつた文章の中にかいまみるからであらう。

読書感想文は、わたくしの教室の生徒たちにとっては、一年間で最も多くの字数を費やす文章表現である。真剣に取りくまねばならない所以である。

○部分的批評の例

○「野島は最初会った時から好きで好きでたまらないのに、大宮自身も少しづつ杉子を好きになって行き、杉子もまた大宮を好きになつていくということを大宮は気づいて、仕事の関係もあつたけれど野島との友情のためにヨーロッパへ逃げて杉子と野島に結婚してもらいたいと思つていたのに、杉子は野島を捨てた。」（『友情』）

（批評）一文があまりに長い。そのために途中で文脈がよじれてしまった。心理がくわしく述べられているだけに惜しい。文章の明確化のために、一文をもつと短かくしたほうがよい。読点にも気を配らう。

（課題）右の文を、四文で書いてみよ。

○「そして、いまずぐに切りとつた方がよいといわれたがそしたら、何年もの間、ベッド暮らしをしなければならなくなるし、ほかに転移する可能性があるというので、彼は医者に切らないようにたのんだが、そうすれば、あと五年しかもたないといわれたが、

彼にはやることがあるので、切らなかつた。」（『あだし野』）

（批評）一文があまりに長いために、文脈がよじれた。読点を打つべきところ、打つべきでないところをよく考えること。文章の明確化のために、できるだけ短い文で、読点をきちんと、と心がけよう。

（課題）1、右の文を五つの文で書いてみよ。2、「彼は医者に……」以下は、語順を工夫しないと意味がとりにくい。語順をよく考へて、意味がよくわかるように書きかえてみよ。

○「僕たち男なら検香にさからうなり、逃げ出すなりできることでも、気の弱い彼女にはどうすることもできず、あげくのはてが彼女を死に追いやつてしまったのであらう。」（『あゝ野麦峠』）
（批評）文章のうまい君にしては、文脈がよじれた。「あげくのはてが」以下は、それまでの文とうまく続いていない。

（課題）「あげくのはて……」以下を、「彼女は」を主語にして書きかえてみよ。助詞に注意。

○「そして老人はただ釣ることだけが目的ではなくて、漁師が海を大事にするように、魚や海を尊敬していた。そういうところ、老人のやさしさが出ていたと思う。」（『老人と海』）

（批評）「老人のやさしさ」という表現でよいのだろうか。もし、よいとすれば、もっと説明がある。「尊敬」と「やさしさ」ということばの間に、君の心中でこの二つのことばがどのようにつながつたのかの説明がある。この説明を君の課題とする。

○『芋粥』を読んで

——生きる目的について思う——

(批評) 題名がよい。副題によって、君の主題がよく表現されている。

○「この人は、好かれることはできても、人を愛することはできない。友情を味わったことがない。私は、少くともこの世に愛や友情が存在することを認め、小さいけれどすばらしい友情を感じている。」(『人間失格』)

(批評) 対比的な考え方をしていくと内容が深まる。自分自身の感想も出しやすくなる。こういう考え方を忘れまい。

○ 全体的批評の例

○ 素直に読まれていて、着眼点もよい。しかし、君の論は、一般化されすぎて、上すべっている。一見やさしい作品だが、深く考えていけばむずかしい問題につきあたらずである。・生きる、・ということ、・やさしいことではないのだから。(『真実一路』)

○ 内容と君の心が、びったりあったようだ。文章もよく流れているが、もう少し深くつっこんでほしかった。「受験」というものについて、たんなる話としてではなく、君自身の思索の中で、その問題点がとらえられ、君の生き方と結びつけられたらよかったのだ。(『学生時代』(受験生の手記より))

○ 近代日本の持っている悲劇的問題点が、よく読みとられ考えられている。君自身の疑問を発展的に考えていったのがよい。主題の

読みとりもまちがっていない。共感をもって読んだ。(『あゝ野麦峠』)

○ ハンスもあれほどの男だから、たんに「無駄」と言いきってしまふのはどうか。ハンスに死をもちたらしめたものについて、もっと深く考えてほしい。(『友情』)

五、読書生活の指導について

読書感想文指導の背景には、「読むことの教育」「書くことの教育」とともに、しっかりした読書生活の指導が位置づけられねばならない。「読書生活指導の大綱」(『これからの国語』一五二頁)「読書生活における分類と体系化」(『毎日の国語教育』藤原与一著、福村書店一五八頁〜一五九頁)など、大切な問題がある。しかし、わたくしは、このことについての具体的な指導実践をまだ持っていない。ここでは、これまでの書きぬきの中から、わたくしの今後の目標としているものを抜粋するにとどめざるを得ない。

○「『読みかた』の指導よりも『読むこと』の指導の方がたいせつであるから、読むことの教育には、読書生活指導の大綱が立たなければならぬ。教科書を中心としても、生活の全面指導のためには、ふさわしい教養の書物・読みものが、適宜に用意され指導されなければならない。」(『これからの国語』一五二頁)

○「読書は、すぐれた書物を多く読むほどよい。そこで、教師としては、内容の優秀なものを順次指摘し、できるだけ、それを提供することに努めなければならない。」(『毎日の国語教育』一五八頁)

○「読書生活でたいせつなのは、「分類と体系」ということである。(中略) 私どもは、読書の生活を、分類し体系化していくことが肝要である。相手の読書生活を指導していく場合にも、分類概念を得させ、体系観を持たせていくことが、指導の急所になると思う。」(同上書一五九ペ)

○「人おのおの、読書の年輪、ともいうべきものを持って、自己の読むことを確保し、継続していくところに、読書の真のたのしみは見いだされるように思う。その年輪は、袋小路ではなく、細くはあっても、その人なりに新しくつくりだされた、かけがえのない道である。それは発見のよこびや想像のたのしさにいろうどられた道でもある。」(『源平桃』二三ペ、「読書の年輪」)

○「この真壁町では、三年来、全児童読書運動が進められ、それのみのはじめている。夕方七時もしくは七時半になると、各部落では、いっせいに拍子木が鳴りわたる。すると、子どもたちは、みんな読書が始めるのである。一、二〇〇人の子どもたちごとく、熱心に三〇分間本に読みひたる。各地区ごとに、年間図書予算一〇万円を確保して、児童読物をもとめているとの話であった。(中略) 地方・地方の文化をおこしていくのに、こうした読書会(サークル)のはたす役割を過少評価してはなるまい。」

学校教育と社会教育との密着した地点に、読書会の使命と機能とがある。」(同上書二六ペ)

それぞれに重要な問題の指摘であり、未来への発展の道を教えてくださっている。これからわたくしは、読書の年輪、を記録するも

のとして、分類と体系化、を考える手はじめとして「読書ノート」について研究してみようと思う。

おわりに

人間としての成長につながる、発見のよこびや想像のたのしさを、いろうどられた読書の道。やがては文化の発展にまでつながる道。わたくしの未熟な指導も、その道の途中のどこかに確かに位置づけられるのかと思えば、ある遙かな思いが胸をみたすのである。それは、国語教育の道を歩むわたくしの人生への思いでもあり、野地先生への感謝の思いとも溶けあうものである。

(本稿は、広島県立広島観音高等学校在動中にまとめたものである。)(昭和55年3月30日)

(広島県立大柿高等学校教諭)